

「慰めの神」Ⅱコリント1：3-6 12・5・13 I 苦しみが私達に与えてくれるもの。1. 自分自身の弱さの自覚。神に生かしていただいているという自覚。2. 神に心から抛り頼む者に私達を変える。「私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危うくなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした」：8, 9。そして「神は、どのような苦しみのときにも、私達を慰めてくださいます」：4。3. 上から目線で、人を見下げる人ではなく、苦しみ、失敗を通して私達は、苦しむ人に寄り添い、思いやり、慰める人に変えられる。「こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです」：4。Ⅱ神が私達を慰めて下さる方法はワンパターンではない。色々な方法で。1. 苦しみの中で心を注ぎ出して祈る時、神は私たちの心に寄り添い触れて慰めて下さる。2. 聖書の御言葉を通して慰めて下さる。聖書通読、ディボーション、礼拝メッセージの御言葉、信仰書、他さまざまな御言葉を用いて下さる。3. 人を通して。「私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私達を慰めてくださいました」Ⅱコリ7：6。パウロの弱さが聖書に正直に記されていること自体、私達は、深く慰められる。自分だけが、気落ちするのではないと慰められる。4. 思いもよらない励まされる出来事を通して慰めて下さる。私自身も、これらの方法で、神に慰められて来た。真実なお方。Ⅲ神は、私達を人々を慰める人として用いられる。その方法もワンパターンではない事を覚えて。1. 良くないやり方。①苦しむ人に寄り添わないで、自分本位に励まそうとしゃべりまくる。これは、かえって、傷つける。②苦しむ人の真の必要（肉体的な必要か、精神的な必要か、霊的な必要か）を見分けなくて、一方的に与えようとする。2. 正しい慰め方。①聖書の「慰める」という原語の意味は、「傍らに呼ぶ」。慰める人とは、苦しむ人の傍らに寄り添う人。あせって励まそうと語り続けるのではなく、沈黙を恐れず、静かに寄り添う。※苦しみの話題に触れず、時を過ごす。その方が語り出したら、静かに耳を傾ける。「聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようになさい」ヤコブ1：19。私達は、この反対をし易い。聞くには遅く、語るには早く、怒るには早い。そうならないように、祈りたい。苦しむ人の言葉は、一貫性がなかったり、一方的な面も多い。だから、同情し過ぎて同化（真実はわからないのに、同意し、ある人を悪く思ってしまう）してはならない。同化、同意ではなく、気持ちを受け止める事ができるように祈りながら耳を傾けたい。②苦しむ人の真の必要を見分ける事がで

きるように祈りつつ寄り添い、的を得た慰め、援助をする。「主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように」Ⅰテサ5：23。すべての造り主である神は、私たち人間を、肉体と精神と霊の統合体として造られた。それゆえに私達が、苦しむ人々を慰め、的を得た援助をするためには、これら三つの面の識別力と協力を必要とする。①肉体的な苦しみのある人には、祈りつつ、内科、外科の治療をしつつ援助をする。食物、着る物の援助。ヤコブ2：15, 16。エリヤが、大きなことを成し遂げた後、燃え尽きのようになり、疲れ切った時、主がなさった援助は、彼に食べ物を与える事だった。Ⅰ列19：1-8。②精神的な苦しみのある人には、祈りつつ心療内科、精神科の治療をしつつ援助をする。寄り添う。寂しさ、孤独、鬱、人への怒り、自分への怒り、責めがある事を理解する。③霊的な苦しみ、求め（罪責からの解放、真の赦し、真の平安、真の救い、死後天国に行ける真の希望）への慰め、援助。寄り添い、関係作りや援助をする中で、相手の方から、霊的な求めや質問がされたら、神が与えられた福音を伝える時です。「あなたがたのうちにある希望（主の救い、福音）について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できるように用意をしておきなさい」Ⅰペテ3：15。この領域は、真の神を信じるキリスト者のみができるなくてはならない使命。このために神は、世界中に、日本中にキリストの体なる教会を置いておられる。「背負いきれない悲しみや苦しみを持つ人がいます。…心の痛みというよりも魂の痛みです。いわゆるスピリチュアルペインです。そんなとき、人間には背負いきれないけれども、背負って下さる方（神）が存在するという事を伝えることはできます。伝えるためには信仰が必要です。どこまでも私達を背負い続けてくださる方を伝えることはキリスト者の務めであると思います」（柏木哲夫。精神科医師。現在名誉ホスピス長）。私達人間が寄り添うのには、限界がある事を自覚して慰めや援助をする事が大切。自分の限界とおのおのの分（「人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです」ガラ6：5）を自覚しないままの無理をした援助は、長続きせず、援助する人も倒れてしまう。できる事、出来ない事の分別、できても、すべき事すべきでない事の分別を祈り求める。援助する人々にも主にある憐れみが必要。神ではない私達人間には、ある人と常にいつも共にいてあげる事、すべてを背負う事は不可能。しかし、主は、違う。苦しむ人々とそして重荷を持つ私達と主は、いつも、そして永遠に共にいて私達を支えて下さる。「胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう」イザヤ46：3, 4。